

<特集随想>往時を回想しながら現今に及ぶ

島本, 昌一 / シマモト, ショウイチ / SHIMAMOTO, Shoichi

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

50

(開始ページ / Start Page)

17

(終了ページ / End Page)

19

(発行年 / Year)

1994-07-09

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019759>

がら、ずいぶん他のことをしていた。日本文学以外の勉強や活動もせっせとしていたし、アルバイトをしなければ本代は作れなかったし、外の語学の学校にも通っていた。お酒を飲んだりお洒落をしたりする時間やお金はなかった。社交も嫌いだ。ずいぶんつきあいの悪い無愛想な人間だと思われていただろう。基本的には、私はそのままここに居続けていくにすぎない。法政大学も日本文学科も、魅力的なところである。何よりも自由だ。誰も何かを強制することはないし、閉じこめられるような陰湿な空気がまったくない。かたまることも、帰属意識も要求されない。誰もおせっかいをやかな

往時を回想しながら現今に及ぶ

島 本 昌 一

いので、指示待ち体質には苦痛だろうが、思うように生き、思うように研究できる。この空気は私には最適だった。良くも悪しくも、日本文学科の学生だという自意識や自己規定がなかったのである。そんなものより、いつも取り組む対象に夢中になれた。それが法政大学の不思議さであり、すごさだと、今でも思っている。私にとって法政大学は、「学校」とか「職場」というジャンルにあてはまらない。空気のように水のように身に沿ってしまっただけ場所なのだと思う。

(たなか ゆうこ・第一教養部教授)

往時を回顧せよとのお話であるが、最近、研究史は風化し、先学の学問にかけた情熱は忘れられているように見える、そこでここでは私がどのような先生に学んだかを記し、その任を果たそうと思う。私は近藤忠義先生(ただよし)(一九〇一〜一九七六)

に俳諧を学び、さらにその源流を見極めたく、大学院では西尾実先生(一八八九〜一九七九)について連歌・能を学んだ。すばらしい先生方であった。

近藤先生は三十一歳の時、岩波講座文学に執筆された「近

松の芸術」が危険思想の烙印を押され、当時奉職されていた東京女子大学を懲戒休講に処せられた。同校はキリスト教の立場から激しい反戦運動の最中であった。翌昭和八年、法政大学に来られたが、ただちに研究室を整備し、機関誌、つまりこの「日本文学誌要」を創刊され、良心的な学問研究の拠点とされた。先生の学風は鑑賞否定論と後に批判されたが、自分に自覚化されない程に情緒化された感性を、科学的に対象化することなく、情緒的に国民をずるずると戦争に導く国文学界の体質と激しく闘われたのであった。先生は豊かな感受性に恵まれていたので、その自己吟味の姿勢から生み出される論説は鋭く激しいものがあつた。十九年、治安維持法により検挙された。戦後は在野の研究組織の確立のため文字通り死闘を尽くされた。

西尾先生というと私はいつもまず第一にフィヒテの『ドイツ国民に告ぐ』を想起する。先生は中世文学の権威であつたが、先生から学んだものはまず「国語の力」であつた。博士過程に進んだ頃はもう先生は高齢でいらつしやつた、若い頃、長野師範学校卒業後、職を辞して東大選科に進まれた頃のはりつめた文学精神は先生の活動の源泉であつたらしい。繰り返しそこに立帰られて回想された。そういうえば近藤先生は賀状でなく春興状を書かれるのが常であつたが、最晩年の状は「春雷や老らくの日の燃えろとて」であつた。影響力をもつすぐれた人物は最後までどこかに若さを保持している人間の

ことであるらしい。

近藤先生の追悼会では、よく先生は授業に殆ど出て来られなかつたという回想を聞く、確かに自主研究を強調されたので、そうであつたような気もするが、どうも実感と合わない。私の世代はたよりなく思われたせいも、よく面倒を見ていただいた気がする。当時、教養部は川崎の木月にあつたが、放課後残っている二十名足らずの学生に、本校から来られた先生は西鶴について熱心に話された。話が終ると、諸君タバコをすつてもよいかかと云われ、タバコをすいながらまた話されるのだった。実に寒い厳冬であつて、権威主義でない教師像に始めて接する思いがしたものである。二年の時は平安朝文学を読んでいただいたが、夏休前には当代の文学芸術、歴史、政治経済の良書を選んだりリストを作つて来られて渡された。帰省前、神田を歩き何冊か求めて高知に帰つた。恐ろしい交通難の時代であり、殆ど二十四時間立ち通しだった。車窓からみる風景、時には踏切に立つ人の表情まで脳裏に刻み込まれている。私は本校に来るまでは郷里の大学で理科を学んでいたが、実は何をしてもよいか分らず、苦しまぎれに手当り次第乱読する数年を持っていたので、知識を羅列する博學に驚きはしなかつたが、近藤先生の一語句を読みとる問題意識の深さと難解な言葉に出会つた時たちどころに膨大な文献を挙げて示される実証力に驚嘆した。大きな刺激を受けて一年間当時上野にあつた今の国会図書館に日参して調べたもの

である。一年間で先生を越えることが出来たと思ったものは、一句の理解のみであった。先生に誉めていただいた時とても嬉しかった。

その頃、法政大学文学部は全国文学ゼミナールの責任校をしていたが、ワルシャワで開かれた学園復興会議に出席する気になったのは、それなりにはりつめた気持をもっていただけらだと思う。帰国後第一回全国ゼミナール会議を開いたことが記憶にある。政治にふり廻され稔りはなかったように思っているが、現在もゼミナールが続いているのを見ると多少の意義はあったのであろう。往時茫茫、一九五六年の頃であった。

ところで、それより一層古い敗戦直後、根岸の子規庵にあ

「あの頃」のこと

「あの頃」をとのご指定だが、となるとこれはほぼ六〇年代の前半ということになる。

った正岡子規手沢本二千冊余が法政大学図書館に托された。故あってまだ公開されていない。年来その公開を要望してきたが、昨年、図書館・研究者双方の協力で和書整理保存の方法を作っていくという提案に接し、多くの方の協力のもとに目下調査をしている。手沢本の殆どは江戸時代の版本であり、明治開化期の気骨のある青年が江戸文学をどう理解したか甚だ興味深い。一日も早く一般公開へこぎつけたい。かつて近藤先生は子規の短歌革新にふれ、子規の言にもかかわらず、古今集の伝統が如何に明治の詩歌にも根強く残っているかを述べられ、古今集の勉強を怠ってはならないことを強調された。今も私の耳に残っている。

(しまもと しょういち・文学部兼任講師)

近 藤 健

当時は「六角校舎」と呼ばれる奇妙な形の建物があり、その三階に「国文学会室」があった。